

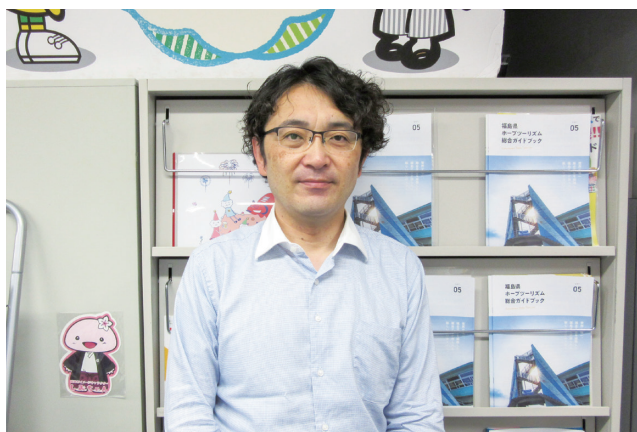


## 放射線リスクコミュニケーション

# 相談員支援センターだより



震災・原発事故の教訓を伝えるために  
 公益財団法人 福島県観光物産交流協会  
 観光部 ホープツーリズム担当副部長  
 兼 オペレーション課長  
 北島 淳也 様



福島県観光物産交流協会（以下、観光物産交流協会）では、福島県と連携し、東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故の記憶や復興の歩みを発信する福島県独自のスタディツアー「ホープツーリズム」を企画しています。令和4年度には、ホープツーリズムの参加者数が17,806名と過去最多を記録しました。

放射線リスクセンターでは、観光物産交流協会からの紹介を受け、福島県を訪れることに不安を持つ学生やその保護者を対象に、放射線不安払拭を目的とした事前学習会の開催等の支援を行っています。

そこで本号では、ホープツーリズム担当として活躍されている北島淳也様にお話を伺いました。

島でしか学ぶことのできないオンリーワンの新しいスタディツアーです。観光物産交流協会では、ホープツーリズムで来県を予定している学校や企業に対し、ツアーの提案等を行っています。

昨年度のホープツーリズムの参加者は過去最多の17,806名を記録し、内訳は、小学生から大学生を対象とした教育旅行が約75%となっています。

——最近の問い合わせの動向について教えてください。

中間貯蔵施設や福島第一原子力発電所視察の問い合わせが増えています。企業からの問い合わせが多いですが、最近では、探究活動を目的とする学校団体からの問い合わせも増加傾向にあります。

——福島県を訪れることに対して、どのくらいの方が放射線不安を感じていらっしゃるのでしょうか。

過去3年間において、放射線不安についての相談を受けた件数は2～3件程でした。

具体的には、学生団体の場合、お子さんを福島県へ送り出すことについて、保護者が漠然とした不安を感じていることがあります。

相談件数としては少なく感じるかもしれませんが、12年余りが経過しても不安を感じる方がいらっしゃる事実は忘れてはならないと思います。

——放射線リスクセンターを実際に利用された感想を教えてください。

福島を訪れることに対して感じる「気がかり」や「不安」は一人ひとり異なります。また、そう感じる背景も人それぞれであるため、安易に回答できない難しさを感じています。放射線リスクセンターには、お客様からの質問に、丁寧に分かりやすく回

——ホープツーリズムの特徴について教えてください。

ホープツーリズムは、世界で類を見ない「複合災害（地震・津波・原子力災害）」の教訓等から「持続可能な社会・地域づくりを探究・創造する」、福

答していただいております。大変感謝しております。専門家の説明を聞いて、少しでも不安を解消して福島にお越しいただけるよう、今後も気軽に相談できる窓口として期待しています。

—福島を訪れた方に、福島の「今」を感じてもらうために必要だと思うことはありますか。

『実際に足を運んでもらうこと』、この一言に尽きます。ツアー参加者からは、「事前にインターネットなどで調べた福島と違った」、「想像していた福島と違った」という声を聞くことがあり、ホープツーリズムの必要性を実感しています。

—問い合わせに対応する際やツアー添乗の際に心がけていることはありますか。

電話やメールによる問い合わせがほとんどですが、福島をどこまで見て学びたいかによって、ツアーの趣旨が変わってくるため、ご希望の詳細を確認するよう心がけています。そのやり取りの中で放射線への不安を伺った際には、専門機関にお繋ぎするなど、不安なくお越しいただけるよう努めています。参加者にとっては、「一生に一度の福島」かもしれません。それを肝に銘じ、ホープツーリズムを通じて、未来に向けて考え続けたいテーマを見つけていただけるよう、受入れ体制を整えてお待ちしております。

—ホープツーリズムを続けてきたことで感じられた「やりがい」や、「良かったと感じること」を教えてください。

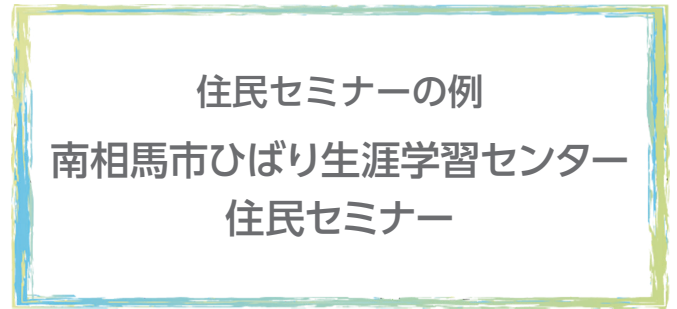
ホープツーリズムに参加される皆さんは、様々な想いを胸に福島の地を訪れています。浜通り地域を訪れ、実際に現地で見聞きした感想や課題、未来への希望について、手紙やメールを頂戴する機会も少なくありません。

福島が経験したことを自分事として捉え、その経験を参加者の方々の未来に活かしてもらえたなら、大変嬉しく思います。

—最後に、今後の展望について教えてください。

ホープツーリズムが広く周知されて、幅広い層のお客様が福島に来県し、浜通りはもちろんですが、福島県全体の交流人口の拡大に繋げていきたいです。

—福島でしか得られない、オンリーワンの学びの活動に取り組みられていることが分かりました。本日はありがとうございました。



南相馬市ひばり生涯学習センター（以下、ひばり生涯学習センター）では、100年という長い人生をより充実したものにするため、時代の流れを知り、今後の生活を考えることを目的として、市民講座「人生100年時代の学び直し講座」を主催しています。

令和5年5月17日、ひばり生涯学習センターより要望を受け、上記市民講座の参加者15名を対象に、中間貯蔵施設等の見学を通して、福島県内での環境省の取り組みについて学び、除去土壌について理解を深めることを目的とした住民セミナーを実施しました。

同市民講座では、令和4年度にも、東日本大震災・原子力災害伝承館の見学と放射線に関する車座意見交換会を実施しており、その時のアンケート結果から、福島県内の除去土壌の保管や処理等の取り組みについて興味がある市民が多いことが分かり、今回の会の開催に至りました。

はじめに、ひばり生涯学習センターにて環境省職員から、「福島県内の除去土壌における環境省の取り組みについて」の説明を受けた後、中間貯蔵工事情報センター、中間貯蔵施設へバスで移動しました。現地では、除去土壌や除染廃棄物等が最終処分に至るまでの間、安全に管理・保管されていることについて理解を深めました。見学の際には、参加者からいくつかの質問が寄せられ、施設担当者が回答しました。例えば、「中間貯蔵施設で働いている方は何人くらいいるのか」という質問には、施設担当者より「現在は約2,000



人が働いており、一番多い時には約10,000人が働いていた」との回答がありました。また、「県外最終処分が終わった後、中間貯蔵施設の跡地はどのように活用されるのか」という質問には、「活用方法については様々な意見があるが、今のところは未定である」との回答がありました。また、開催後に実施したアンケートには、「テレビや新聞の情報と違い、今回のセミナーはインパクトもあり、大変参考になった」、「実際に見ることで理解が深まった。百聞は一見に如かずだと思った」等の感想が寄せられ、実際に現地を訪れ、現状を知ることの大切さを参加者のみなさんが実感されたようでした。



今回の中間貯蔵施設の見学で学び、感じたことを、周囲のご家族やご友人などに伝えていただければと思います。

## 専門家派遣の例 飯舘村前田地区 専門家派遣

飯舘村前田地区には、平成18年の開園以来、住民が協力し合って整備してきた観光ワラビ園があります。福島第一原子力発電所の事故前は、毎年県内外から多くの観光客で賑わい、地域のお年寄りや子どもたちが収穫体験等を通して世代を超えた交流の場としても重要な役割を担っていました。閉園中の今も、前田地区住民の心のよりどころとして存在しています。

そのような前田観光ワラビ園の現状について、「地区の住民で集まり、前田観光ワラビ園のワラビに含ま

れる放射能濃度を測定し、結果について住民同士でざっくばらんに話をする機会を設けたい」との前田地区からの要望を受け、令和5年5月19日、地域の集まりへ専門家派遣を実施しました。

今年5月の大型連休明けに降りた霜でワラビが溶けてしまうという事態が発生し、一時は会の開催が危ぶまれましたが、当日朝、無事にワラビを収穫し、会を開催することができました。

初めに、①観光ワラビ園のワラビ(生)、②参加者が持ち寄った塩漬けのワラビとフキ、③塩抜きしてすぐに食べられる状態のワラビの順に測定し、塩漬け、塩抜き後のワラビの測定結果が不検出であったことから、調理加工により、食品中の放射能濃度が低減することについて理解を深めました。



その後、測定結果について参加者間で意見を交わし、参加者からの質問に講師が回答しました。

参加者からの「放射性セシウムを体に取り込むと、どんどん溜まっていくのか」という質問に対して「代謝により排出され、大人の場合、約70日で半分になるといわれている」と回答しました。また、「タラノメを食べた後に、何度かホールボディ・カウンタを受けたことがあるが、放射性セシウムが検出された時と、検出されない時があった」という質問には、「同じタラノメでも、場所によって放射能濃度が違うためである」と回答しました。

当日は、前田地区の住民に加え、飯舘村社会福祉協議会の放射線相談員、生活支援相談員のみなさんも参加し、和気あいあい和やかな雰囲気の中、会が進められました。

今回の研修会で得られた知識や情報を、飯舘村ならではの暮らしを楽しむために役立てていただければ嬉しく思います。

## 住民セミナーの例 森村学園高等部 事前学習会

令和5年6月20日、神奈川県横浜市にある森村学園高等部1年生の生徒163名および保護者4名を対象に事前学習会開催しました。

森村学園高等部では、今年11月に福島県の会津、浜通り地方への訪問を予定しており、生徒が福島県を訪れることについて一部の保護者より「福島県内の放射線による人体への影響が心配」との声が上がったことから、福島県観光物産交流協会を通じて放射線リスクセンターが依頼を受け、生徒の事前学習及び一部の保護者の放射線に対する不安の払拭を目的に、放射線の基礎及び健康影響等について説明を行いました。

当日は、原子力安全研究協会の松原昌平先生が講師を務め、講義「福島県研修旅行に向けて～放射線についての事前学習～」では、事前に寄せられた福島県の放射線に関する不安や質問に沿いながら説明を行いました。はじめに、福島第一原子力発電所事故の概要について、次に放射線の基礎として、放射線の種類や性質、身の回りにある放射線について説明した後、放射線の健康影響に関することとして、低線量被ばくによるリスクやUNSCEARの報告書の内容を踏まえながら解説しました。加えて、訪問を予定している浜通り地域の現状について、事故直後からの空間線量率の推移、避難指示区域の変遷がわかるスライドを用いながら説明を行いました。

講義終了後、受講した生徒からは「仮に研修旅行中、放射線関連の事故が発生した場合、どのように対処すべきか」また保護者からは、「除染作業に携わる方々は、どのような安全基準をもとに作業を行っているのか」等の新たな質問が寄せられました。1つ目の質問に対しては、「事故が発生した場合、最も危惧すべきは住民によるパニックが生じることである。避難経路や方法等については自治体等からの指示に従い適切な行動を取るべきである。また、遮蔽・距離・時間による外部被ばくを防護するための原則を念頭に置いておくこ

とも有効である」と回答しました。また、2つ目の質問には、「除染作業員等、放射線を扱う職業人は5年間で100ミリシーベルトかつ1年間で50ミリシーベルトを超えることがないように、法令により線量限度が定められている。また、被ばく線量を測定する線量計を携帯することで、放射線業務従事者の被ばく線量が管理されている」と回答しました。



開催後のアンケートには、「放射線について知識が無かったため偏った考えを持っていたが、講義を聞いて放射線について理解が深まった。福島での研修旅行も安心して楽しめると思う」(生徒)、「何となく怖がっていた放射線について少し理解が深まり、正しい判断ができるようになったと思う」(保護者)等の感想が寄せられました。

福島県内外問わず、一人でも多くの方に福島県の現状や放射線について正しい理解が広まることが風評の払拭に繋がると考えます。福島の地を訪れ、研修旅行で学び得たことを地元を持ち帰り、多くの方に伝えてもらえる嬉しく思います。

放射線リスクセンターでは、福島県へ訪問を予定している個人、団体から依頼を受けた放射線や福島の実状に関する説明や質問等について、主にオンラインで対応しています。なお、ご要望内容に応じて、現地での対応も行っています。まずはお気軽にご連絡ください。

放射線リスクコミュニケーション相談員支援センターだより No.36

発行：放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター

連絡先：〒970-8026 いわき市平字小太郎町1-6  
いわきセンタービル5階

フリーダイヤル：0120-478-100

FAX：0246-35-5158

E-mail：F-sodan@nsra.or.jp

